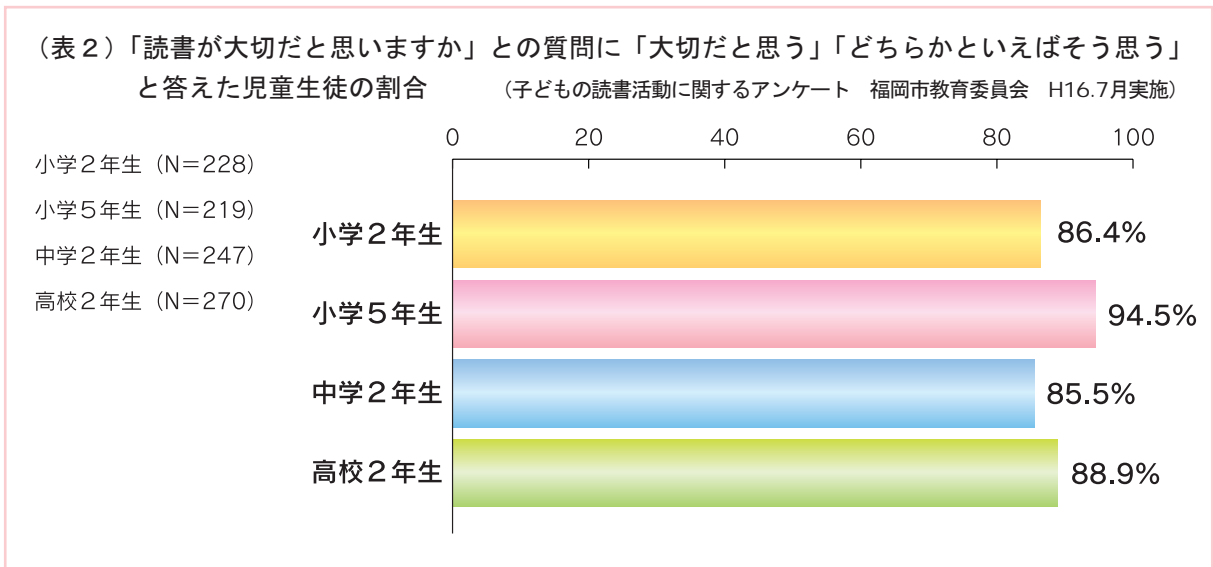
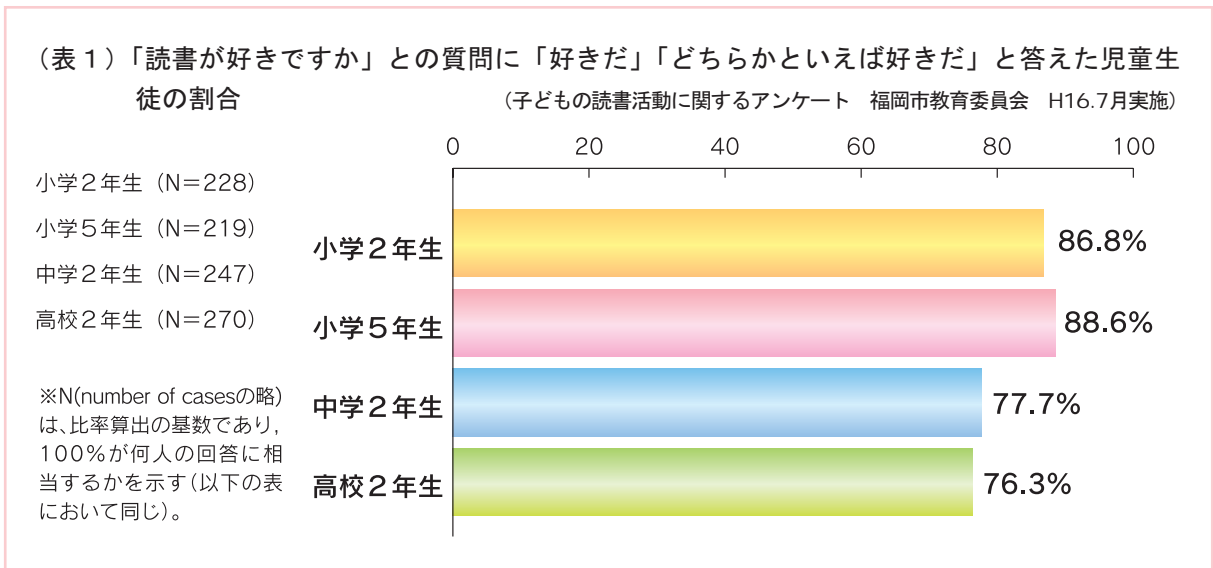


第1部 子どもの読書活動の意義

1 子どもの読書活動の現状

(1) 子どもの読書活動に関するアンケート結果

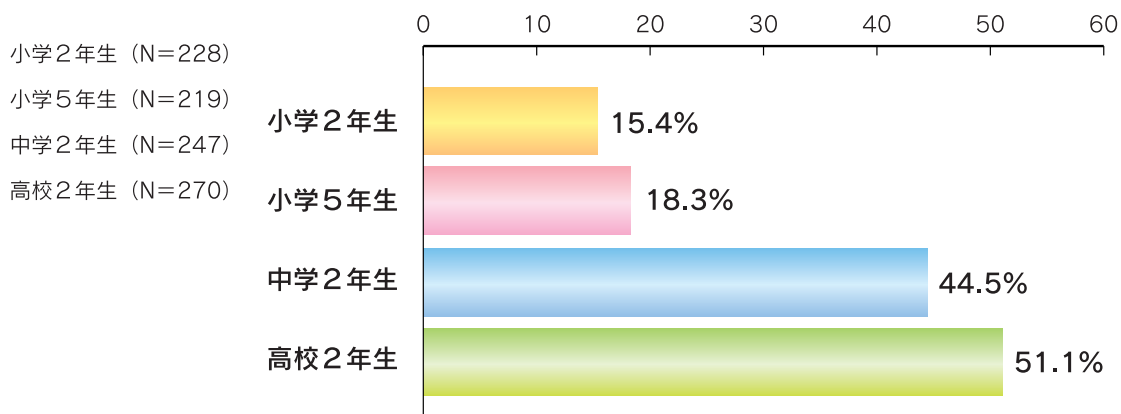
本市が平成16年7月に実施した「子どもの読書活動に関するアンケート」によると、「あなたは読書が好きですか」という質問に対し、「好きだ」「どちらかといえば好きだ」と答えた児童生徒の割合は、小学2年生、5年生、中学2年生、高校2年生でいずれも高い値を示しています。また、「あなたは読書が大切だと思いますか」という質問に対し「大切だと思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた児童生徒も高い割合となっています（次表1、2参照）。



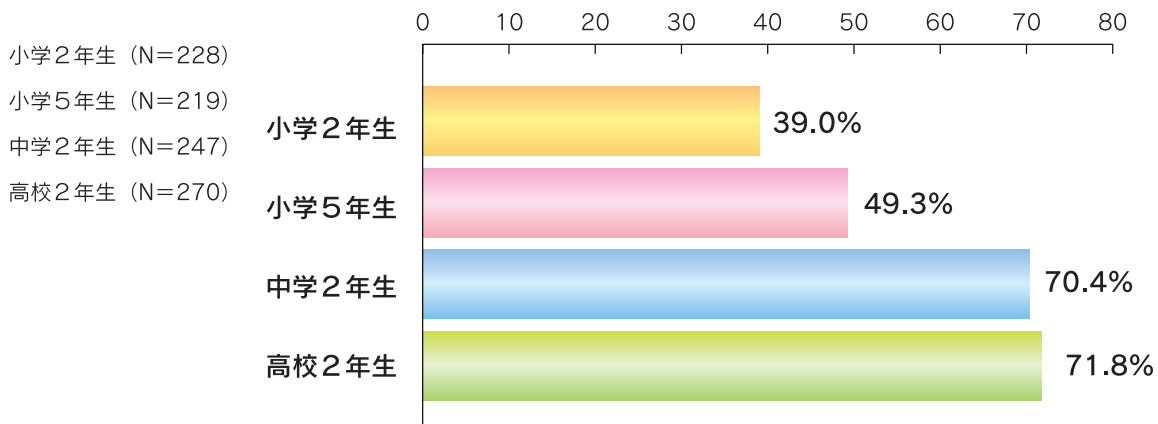
また、「どんなときに本を読んでいてよかったと思いますか」という質問に対しては、「読んでいて楽しい(おもしろい)」が69.5%(全区分平均)のほか、「知らないことがわかる」「国語の力がつく」「考える力がつく」が続いており、楽しみながら読書を役立てている姿が浮かびあがってきます(資料編46ページ「子どもの読書活動に関するアンケート」参照)。

しかし「1カ月に何冊本を読みますか」という質問には「読まない」「1冊未満」と答えた児童生徒の割合が、学年が上がるにつれて高くなり、中高生では約半数になっています。これは全国的な調査結果とも類似の傾向となっています。一方、マンガを月に1冊以上読む児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて高くなり、中高生では本を読むよりマンガを読む方がはるかに高い割合を示しています（次表3、4参照）。

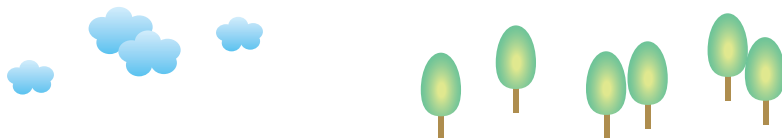
(表3) 「1カ月に何冊本を読みますか」との質問に「読まない」「1冊未満」と答えた児童生徒の割合
(子どもの読書活動に関するアンケート 福岡市教育委員会 H16.7月実施)



(表4) 「1カ月に何冊マンガを読みますか」との質問に「1冊以上」と答えた児童生徒の割合
(子どもの読書活動に関するアンケート 福岡市教育委員会 H16.7月実施)

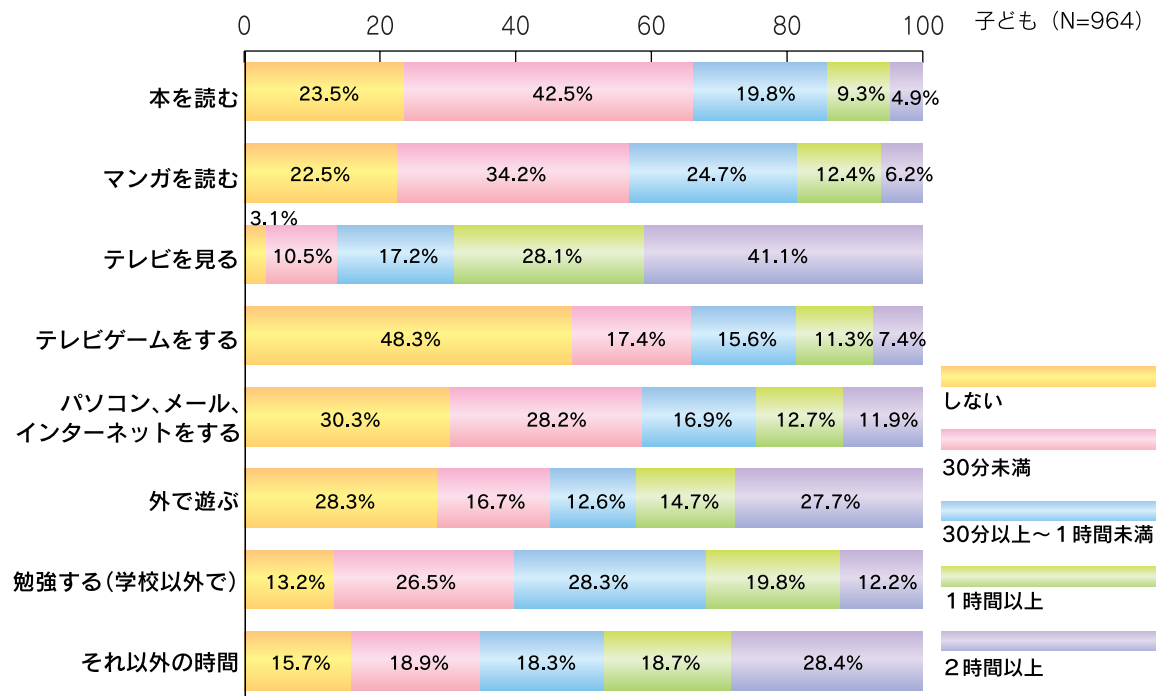


また、同じアンケートで子どもの平日の過ごし方を見てみると「本を読む」「マンガを読む」時間は他の過ごし方より短く、「テレビを見る」「外で遊ぶ」が長い時間となっています。一番多くの時間を費やしているのは「テレビを見る」ことで、平日の多くの時間が費やされていることがわかります（次表5参照）。



(表5) 平日の過ごし方(小学2年・5年生, 中学2年生, 高校2年生の平均)

(子どもの読書活動に関するアンケート 福岡市教育委員会 H16.7月実施)



(2) 子ども読書会議の結果

本市では平成16年8月に市立の小学生, 中学生, 高校生の代表35人に集ってもらい, 子ども読書会議をそれぞれ開催しました。出席してくれた子どもたちは, 学校で図書委員をしているなど比較的読書が好きな子どもたちで, 読書の楽しみ方やその楽しさを広めるための方策など, 多くの意見を発表してくれました(資料編64ページ「子ども読書会議」参照)。

読書の楽しさとしては「いろいろな人の考え方や生き方を知ることができる」「想像をふくらませることができる」さらに, 楽しみ方として「話題の本を読み, 同じ本を読んだ友人と意見交換をする」など多くの意見が出されました。

また, 読書の楽しさをみんなに広める方策としては, 「友人同士で本を紹介しあう」「学校図書館で新刊書や人気のある本のコーナーをつくる」「学校図書館で本の検索ができるようにする」「朝読書を広める」「学級文庫を充実する」などの意見が出されました。

出席者は, 学校図書館の利用者がもっと増えたり, みんながもっと本を読むようになればいいと考え, 学校の図書委員会活動を中心に活発に活動していますが, 周りの子どもたちの読書活動がなかなか進まないことが気になる様子が見られました。

(3) 子どもの読書活動の現状

これらの結果から見てくる子どもの読書活動の現状は, 子どもたちは, 読書の大切さを認識しており, 本を読むことは楽しいと思いつつも, 実際には一部の子どもを除いて, テ

レビや外で遊ぶことなど、読書以外のことの方に多くの時間を費やしています。また、年齢が上がるほどマンガを読む量が増える一方で、本を読む量は減っており、本離れが進んでいるというのが現状と思われます。

諸外国との比較で日本の子どもの置かれている現状を見てみると、平成12年に行われたPISA（経済協力開発機構(OECD)生徒の学習到達度調査）によれば、「趣味としての読書をしていない」と答えた生徒（15歳児）は、OECD平均では31.7%ですが、日本では55.0%となっており、調査対象の31カ国中最も高く、「どうしても読まなければならないときしか、本は読まない」と答えた生徒は、OECD平均では12.6%ですが、日本では21.5%となっています（資料編75ページ「PISA（経済協力開発機構(OECD)生徒の学習到達度調査）」参照）。

このように読書を楽しんだり、自主的な読書活動をしている日本の児童生徒の割合は、国際的に見ても少ない状況にあります。このことは子どもを取り巻く日本の家庭・地域・学校などの環境が、子どもの読書活動に抑制的に作用していることを推測させ、子どもの読書について考えるとき、子どもの育つ環境についても注意を向けることの重要性を示しているといえます。

2 子どもの読書活動の重要性

(1) 子どもの読書活動の推進に関する法律

子どもの活字離れや国語力の低下、対話による問題解決能力の低下などが指摘されている中、子どもにとっての読書の重要性にかんがみ、子どもが自主的な読書活動を行うことができる環境整備を図ることを目指す、「子どもの読書活動の推進に関する法律(法律第百五十四号)」が、平成13年12月に公布・施行されました。

この法律においては、子どもの読書活動を「言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないもの」として意義づけています。

さらに同法では、子どもの読書活動推進に関する基本理念を定め、国及び地方公共団体の責務などを明らかにするとともに、国が「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」を策定・公表すること、4月23日を「子ども読書の日」とすることなどを定め、国が施策を総合的かつ計画的に推進するとしています。

(2) 子どもの読書の意義

子どもは本を読むことで日常生活を離れ、現実では体験することのできない人生やさまざま

まな場面に出会うことができます。その中で喜怒哀楽を感じたり、わくわくすること、ほっとすること、励まされることなどさまざまな気持ちを味わいます。読書は自分の関心や興味に合わせて、気軽に余暇や趣味として楽しめ、生活の楽しみとなります。

また、読書が人の一生において果たす役割はきわめて大きく、読書を通じて身につけていくものは数多くあります。

子どもが本と出会うのは、乳幼児期の保護者などからの絵本の読み聞かせ（本を読んでやること）です。子どもは保護者などの愛情のなかで、読み聞かせの楽しさや心地よさを感じながら、言葉や物を覚え、想像力を働かせたり、自分で考えたりします。読み聞かせは感性を豊かにしながら、脳の発達を促し、その後の人格形成の基礎を築きます。

就学期に子どもが字を覚え、自分で本を読むことができるようになると、本への興味はさらに広がります。楽しみながら、好奇心や探求心を持ち、自ら進んで本の世界に浸り、知識や知恵を得ながら、主体的に学ぶ意欲や力を身につけていきます。

児童生徒期には関心のある分野の本をさらに読み進むことができるようになり、本から実際では体験できないさまざまな豊かな経験をすることができます。さらに、想像力を使い本の中に入り込み、人間や人生など、生きていくうえで重要なことについて学んだり、考えることで、人生観を高め、人格を形成していきます。

また、読書は子どもが変化の激しい社会に対応していくために、さまざまな問題について考え、判断し、行動して解決する能力を育むことにも役立っています。

さらに、読書を通してすぐれた文章に触れることで、語彙（い）力や文章を書く力など、国語力が向上し、表現力をつけ、創造性を高めることも期待されます。

少子高齢化、高度情報化などにより、社会の状況が変化しても、子どもにとって読書活動の持つ意義は本質的には不変のものであり、自分の将来に夢を持ち、自己実現を図っていく礎となる、きわめて重要なものなのです。

このような子どもの読書活動を進めるためには、乳幼児期、児童生徒期という子どもの成長の時期や状態に応じて、一人ひとりにふさわしい本と出会うことができること、それとともに本について一緒に話すなど、周りの大人と読書を共有できる時間が持てることなど、子どもが本に親しめる環境づくりが大切です。

こうした視点から、社会全体で子どもの自主的な読書活動が進められるように取り組むことが重要であり、市民や読書活動をする市民団体、家庭・地域・学校や図書館などと連携しながら、市を挙げて具体的に施策を進めていく必要があります。